

中国人大学生の日本語教育に役立つ クラブ活動のあり方について

A Practical Study on How to Execute Club Activities Beneficial to Japanese Learning of Chinese University Students

王 尤

要約

为了让外语专业的学生在国家规定的教学时数以外能够系统有效的全面获取所学外语国家的文化知识，中国很多高校利用外语社团活动，把外国文化教育与社团活动相结合，给外语学生提供实践机会，加强学生对外国文化的了解。同时，力求解决零起点外语专业教学时数不充足的问题。

笔者所在的吉林华桥外国语学院是有着十个语种专业的省级重点大学。笔者作为该校日语专业教师任职十年以来，通过对学生的观察和对社团指导工作的体会，发现外语专业社团在取得一定效果的同时，也存在着学生勉强参加和教师指导困惑的现象。参加社团活动的学生的收获与学校、教师的努力不能成正比的原因究竟在哪里？

为此，笔者在吉林华桥外国语学院日语专业教师和学生中展开调查，把收集的调查数据用 KJ 法和 KH Coder 软件进行科学的分类和分析，依据美国芝加哥大学的心理学家米哈里・契克森米哈（M. Csikszentmihalyi）的涌流(flow)理论和美国心理学家德西和瑞安（Deci&Ryan）的自我决定理论（SDT: self-determination theory），找到问题的关键所在，对中国日语专业大学生如何行之有效的开展日语专业社团活动应该注意的事项进行了提案。

【キーワード】中国の大学、日本語教育、日本語関連クラブ活動、モチベーション、調査

1. 研究の背景

1-1 中国の高等教育における正課外日本語関連クラブ活動

中国の大学において、日本語が専攻として設けられてから 65 年が経ち(2014 年の時点)、日本語の教育システムが規範化しており、急速に変化する時代にマッチする有効的な教育方法が求められている。そうした中、外国語を学ぶ学生に必要な文化の指導に与えられる正課時間数が少しずつクラブ活動に委ねられるようになってきている。

2011 年中国東北部日本語コンテストに参加した大学 28 校に対する筆者の調査結果では、28 校すべてが日本語関連課外クラブ活動を行っている。筆者の勤務する吉林華橋外国語大学¹（以下「J 大学」と称す）の場合は、日本語教師に呼びかけて、茶道、会話、アニメ、

文学作品鑑賞など 12 の日本語関連クラブを教師指導のもとで設け、日本語を主専攻とする学部生に参加を義務付けた。

ところが、日本語関連クラブに参加する学生によく見られる現象として、「発言がすくない」、「無表情」、「出席回数が大学の単位認定の最小限の 8 回に満たすと出席しなくなる」などが上がっている。

1-2 日本語の勉強に役立つ日本語関連クラブ活動の有効性の検証

筆者は本研究の前準備として、2013 年より J 大学において既存のカリキュラム内の日本語クラブ活動以外に、日本人による空手道指導クラブを企画・実施した。

該当活動は、大学のカリキュラム以外の活動であり、カリキュラム内の活動とは幾つかの違いがある。1) 指導者は日本人で外部の者である、2) 参加者はほかの学生が学習している時間を利用して参加することにより、勉強を妨げるリスクを負っている、3) 指導者と参加者の間は、新鮮感を互いに持っている、4) 指導者も参加者も、自発的な行為であるため、活動参加の意欲が高い。

活動後の 2 年間にわたり、参加者にもたらす影響を 2 回に分けて追跡調査した。その結果を次のように発表した。

「単位も評価点も得られない自由参加の活動であるにもかかわらず、学生達が最後まで積極的に参加した。分析の結果から、次の 2 点が明らかになった。

1. 調査対象者の日本語学習のモチベーションが向上した。
2. 調査対象者の日本語科目試験の成績が上がった。

活動の成功が学生に日本語学習のモチベーションの向上につながった。モチベーションの向上を活動終了後も保ちつつ、参加者の日本語学習の姿勢に現れ、成績の向上を促した。」(王 2014)

カリキュラム外(空手道)活動は、参加者の日本語勉強に積極的な働きを果たしたと証明できた。成功に終わった要因は、6 点あった。

「1) 大学の方針に合致した活動であったこと、2) 指導者が日本人かつ外部の者であったこと、3) いかなる報酬もなく自由に参加ができたこと、4) 学生通訳を設けていたこと、5) 運動系の活動により心身が活性化したこと、6) 活動の目標設定(演武)があったこと」(王 2014)

このように、日本語関連クラブ活動は、うまく実施されると、参加者の日本語学習意欲を高め、学習効果をよくすることができることが明らかになった。

1-4 本研究の理論的枠組み

心理学では、「フロー現象(flow)」という理論がある。フローという状態に置かれた人間の行動は、喜びを味わうことに集中して、積極的に行動していくという。フロー現象を提出したチクセントミハイ（1996）は次のように述べている。

「意識の中に入り続ける情報が目標と一致しているとき、心理的エネルギーは労せず
に流れる。（中略）『なかなかいいじゃないか』。肯定的なフィードバックが自己を強化
し、より多くの注意が内外環境を処理するために解放される。」（チクセントミハイ
1996）

チクセントミハイ（1996）は、図1でフローに達成する条件を示した。図1は、ある
特定の活動を表しているという。図の横軸は「能力」、縦軸は「挑戦」を表している。A

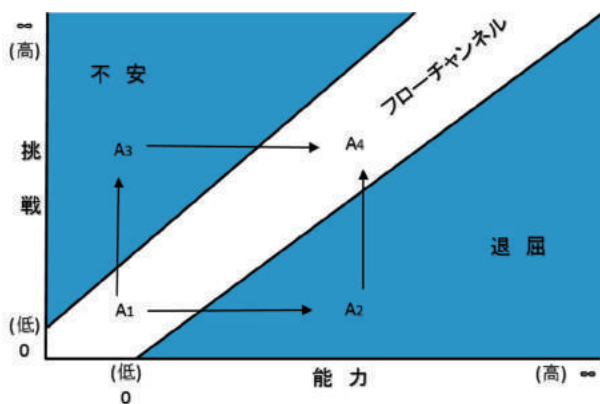


図1 フロー体験の結果、意識の複雑さが増大する
理由（チクセントミハイ 1996）

は特定の活動をする人物を表す。A1～
A4は、Aの異なる時点を表している。A
は初めて活動をする時、その活動の難
度は彼の未熟な能力とちょうど合致し
ているので、Aはその活動を楽しむこ
とができるため、フローの中にいると考
えられるという（A1）。

しかしAはこの段階に長くは留まる
と、能力が進歩し、退屈し始める

（A2）。そこで、活動の難度を高める

ことができれば、Aは自分の能力に不安を感じる（A3）。退屈と不安はAにとっては望ま
しい経験ではないので、Aはフローの状態に戻るよう動機づけられる。そこで、Aには二
つの可能性が与えられる。一つは、この図から消えること、つまりこの活動を放棄する
ことである。もう一つは、挑戦の水準を上げることである。挑戦の水準を上げる時に必
要なのは、その時のAの能力よりも困難な目標を課せられることである。

つまり、人間はある特定の活動をする時、最初にフローを感じられるとしても、常に
フロー状態が保てられるわけではないのである。常にフロー状態にいるためには、
自らか、外力によって、その時の能力よりも上回る新たな目標を与えられることが大切
である。

また、Deci と Ryan, Flaste による自己決定理論（Deci & Ryan, 1985）（Deci &
Flaste, 1996）は無動機づけ、外発的動機づけ、内発的動機づけをつながりのある一連の
段階として捉えることにした。自己決定の段階性については、桜井（2009）で分かりや
すく図にまとめてあるので、ここで引用して参考にする。（図2）

行動	他律的 ← → 自律的					
動機づけ	無動機づけ	外発的動機づけ				内発的動機づけ
自己調整 (内在化)	なし	外的調整	取り入れの 調整	同一化的 調整	統合的調整	内発的調整
自己調整に関 する事項	・非意図的 ・有能感の欠如 ・統制感の欠如	・従順 ・外的な報酬 や罰	・自我関与	・個人的な重 要性 ・感じられた 価値	・気づき ・自己との統合	・興味・関心 ・楽しさ
感じられた因 果の位置	非自己的	外的	外的寄り	内的寄り	内的	内的
学習行動の理 由例	やりたいとは思 わない	「人から言わ れるから仕方 なく」 「やらないと 叱られるか ら」	「やらなけれ ばならないか ら」 「不安だから」 「恥をかきた くないから」	「自分にとっ て重要だから」 「将来のため に必要なだ から」	「やりたいと思 うから」 「学ぶことが 自分の価値観 と一致してい るから」	「面白いから」 「楽しいから」 「興味がある から」 「好きだから」

図 2 自己決定の段階性 ((桜井 2009) より)

全く動機付けられていない無動機づけの人も、何らかの制約に屈服してある行動をとるとすると、その時から、外発的動機付けへ転じ、外的調整段階に相当する。その行動が進んでいく中で、「自分にとって重要だから」、「やりたいと思うから」など同一化調整から統合的調整の段階へと進んでいく。やがて内発的動機付け、つまり内発的調整の段階へと転じる。これは J 大学の日本語関連クラブ活動が期待する理想的なパターンであろう。

2. 研究の目的

日本語教育に役立つための日本文化を指導するカリキュラム内のクラブ活動の問題点を明らかにすることが重要であると考え。そこで本研究においては、J 大学の日本語関連のクラブ活動の事象観察と分析から着目し、日本語を専攻として学ぶ中国の現代大学生にとって、日本語の勉強に役に立つために行われた日本語関連のクラブ活動を、どのように運営するべきかを明らかにすることを目的とする。本研究の結果は、J 大学のみならず、中国の大学で日本語を専攻するすべての学生にとっても有益であると思われる。

3. 研究対象と方法

3-1 調査の対象

2014 年 9 月に、日本語関連のクラブ活動を指導している日本語教育歴がそれぞれ 9 年

と4年の中国人教師2名を対象にインタビュー調査、12の日本語関連のクラブ活動に参加した167名の学生を対象に調査票調査を実施した。表1は、調査対象となった学生の内訳である。

表1 調査対象学生の内訳

	性別		兄弟構成		学年			出身地					
	男	女	一人っ子*	非一人っ子	2年	3年	4年	華北	東北	華東	中南	西南	西北
調査人数	30	137	129	36	63	60	43	16	92	31	13	3	9
%	18.0%	82.0%	78.2%	21.8%	38.0%	36.1%	25.9%	9.8%	56.1%	18.9%	7.9%	1.8%	5.5%

一人っ子の占める割合が、集団活動に影響を与えることが侯（2002）と陳・李・王（2011）の研究により明らかになっている。また、羅・餅原・久留（2001）と侯（2002）の研究では、中国の一人っ子である現代の大学生は、いろいろな面で高能力が見られるが、自立性が弱く（特に女子の場合に）、非協調性が高く、親に対する服従が特徴的になっていることが明らかになった。

本稿では、一人っ子でなくても、最も年齢の近い兄弟との年齢差が6歳以上ある調査対象者の場合も、一人っ子と似た成長環境に育てられたと判断し、一人っ子として計算した。

3-2 研究の方法

3-2-1 データの収集方法

教師に対するインタビューでは、「1）日本語関連クラブ活動を行う目的について、2）決まった教師が常時指導することの必要性について、3）指導時に使用する言語について、4）学生の参加状況について、5）教師のクラブ活動指導の捉え方について、6）その他地球村²で行った授業の取り組み全般について」を基本項目として予め用意し、インタビュー対象者と自然な会話を1人30分行った。

学生対象の調査票は中国語によるもので、主に記述式であった。今回の研究はどこまでの展開が必要になるか把握できなかったため、質問調査票は本来A票とB票合わせて28問あったが、今回の研究はそのうちの16問の回答結果のみを使うことにした。その詳細は第4章「結果と考察」で述べるが、16問の内容を日本語に訳し、本稿の最後に添付する。

3-2-2 データの分析方法

教師に対するインタビューはすべてICレコーダーに録音したあと、逐次文字化した。文字化した内容をKJ法³によってデータ分類した。学生から回収した調査紙を、項目の内容に合わせてKJ法とKH Coderソフト⁴を用いて分析した。

4. 結果と考察

4-1 教師に対するインタビュー調査の結果

調査協力者の日本語関連のクラブ指導教師 2 名の意見を表 2 にまとめた。

教師がクラブ活動を指導する目的は、日本文化に対する理解を深めることによって、学生の日本語を学習するモチベーションを高め、日本語学習の効果を向上させることである。指導教師 2 名とも教師の役割が重要だと認識しているが、活動の現場に行く必要があまりないと感じている。場合によって、指導教師が行くことによって、監視されているように学生に見られると捉えられた。指導用語に関しては、教師 2 名の意見が分かれた。たとえ学生の日本語力が低くてもなるべく日本語で指導したほうが良いという意見と、日本語にこだわるよりも学生に分かってもらえたほうが良いという意見である。そして、1 名の教師は、授業の延長としてのクラブ活動も効果的だといった。その原因は、授業の教材よりも自由度が高いからであるという。

教師 2 名とも、自分自身の指導力不足を感じている。原因の一つは、クラブ活動指導以外の仕事や研究に追われていることを挙げている。もう一つは、どんな言葉が必要になるか予想できないクラブ活動での日本語能力の不足を挙げている。そのほか、クラブ活動の必須参加を考え直すべきという同じ意見があった。

表 2 日本語関連クラブ指導教師 (A と B) 2 名の意見

目的	<ul style="list-style-type: none"> ● 参加者の日本語に対する興味を引き出す。(A) ● 参加者の日本語能力を高める。(A) ● 日本文化に対する理解を深める。(AB) ● 文化と関係あるクラブの場合は、日本文化を知ることによって日本語に対する理解を深める、それによって語学力を高める。(A) ● 視聴クラブ、教授法研究クラブの場合は、正課の授業と同じようなやり方で語学力を高める。(A) ● 参加者のニーズに合わせた内容の活動を行い、日本語学習のモチベーションを高める。(B)
指導教師の役割	<ul style="list-style-type: none"> ● 日本語クラブに指導教師の存在は非常に大切である。(AB) ● 指導教師があまり活動の現場にいと、監督しているようにみられる恐れがあるので、あまり活動現場に現れる必要がない。(AB) ● たまに活動現場へ行くと、参加者の励みになる。(B)
指導用語	<ul style="list-style-type: none"> ● 日本語で活動することに拘らないほうが良いと思う。(A) ● 参加者は低学年生ばかりなので、日本語で指導すると、参加者との交流も困難である。(AB) ● 外国語大学で、外国語クラブだから、なるべく外国語で指導したほうが良いと思う。(B)

参加者の状況	<ul style="list-style-type: none"> ● まじめに参加したいが、会議や宿題が終わらないなどで欠席する場合が多い。(A) ● 1年生の場合は、大学の生活にもまたなじんでいない。あれもこれも掴めないように思う。日本語クラブ活動の参加を負担に感じる学生が多い。(AB) ● 3年生、4年生は日本語力がついていて、比較的自由な時間も多し。彼らにとって日本語クラブは非常に意味のある存在だが、すでに必要なクラブ参加の単位が取れているため参加しなくなって残念に思う。(B) ● 学期ごとに参加者が総入れ替わりするので、いつも一から始まる。(B)
指導者としての自分自身の状況	<ul style="list-style-type: none"> ● 自分自身は教師の経歴が短く、普段の授業以外は日本語教育学の研究に時間を費やしたいが、クラブ活動に与える時間がないと感じる。(AB) ● 日本語クラブの参加者が期待しているような指導ができない無力感を感じる。(主に教科書以外にある生活に密接な内容) (AB) ● 日本語クラブ活動の現場へ行っても、学生の中に入り込めなくて、行きづらい。(A) ● 指導している日本語クラブは自分の得意分野ではない。以前の指導教師から受け継がれた。新たな自分の指導できるクラブを作ってもいいが、時間と精神的余裕がなくこのまま維持している。(A)
その他	<ul style="list-style-type: none"> ● 日本語クラブ活動は授業と同じ内容(やり方)でもいいと思う。なぜなら、授業で使う規定の教材は古い。その点クラブでは制限がなく、授業よりも面白い教材を使うので、歓迎される。(A) ● 日本語クラブの参加は必須にしないほうがいいと思う。学生が反感に思っている。(B) ● 学生は早くクラブの単位を取ろうとして、いつも新入生が一斉にクラブの参加を希望する。日本語クラブが12あるが、茶道・会話クラブなど人気クラブは定員制なのでそれに外れた人は興味のないところに入るしかないので、活動に熱心ではない。(B)

4-2 学生に対する調査票による調査の結果

質問「今の専攻を選んだ経緯は以下のどれか」に対する回答では、調査対象者167名のうち、自分の意志で日本語を主専攻にしたのは70人、41.9%で、「親の意見に従った、選んだ専攻に合格できなかったため配属された、原因がよく分からない」などの学生は97人、58.1%いた。

質問「参加したクラブ活動の状況はどうだったか」に対する回答は、「よかったと思う」のは53.3%を占めた。「イマイチよくなかった」、「活動をただけで、あまり効果がなかった」、「活動が途中で終わってしまった」などを答えたのは46.7%いた。

「よかったと思う」学生の表3で示した質問項目に対する答えは調査対象者全体の答えより肯定的な答えが大きな割合を占めた。

表 3 調査者全体(167 人)の答えと

参加したクラブ活動が「よかったと思う」学生（87 人）の答えの対比

	調査対象者全体 (167 人)	参加したクラブが 「よかったと思う」 (87 人)
第一希望で日本語関連クラブに入れた	114 68.7%	65 74.7%
あなたが参加したそのクラブの指導教師はネイティブの先生だった	91 52.9%	55 63.2%
あなたが参加したそのクラブの指導先生は毎回、あるいは 2 回に一度活動現場に来てくれた	107 64.1%	63 72.4%
クラブ指導教師の存在が大切だと思う	124 81.6%	73 83.9%

参加したクラブがよかったと思う学生は、第一希望の参加者が多かった。また、日本人ネイティブ教師による指導を受けた者が多かった。そして、クラブの指導教師が毎回或いは 2 回に 1 度活動現場に来ていた。つまり、第一希望の参加で、日本人ネイティブによる指導で、指導教師が頻繁に活動現場に来るクラブ活動のほうが、活動による効果がよかったとの傾向がある。クラブの指導教師の存在価値については、調査対象者全員が高い割合で大切だと考えている。

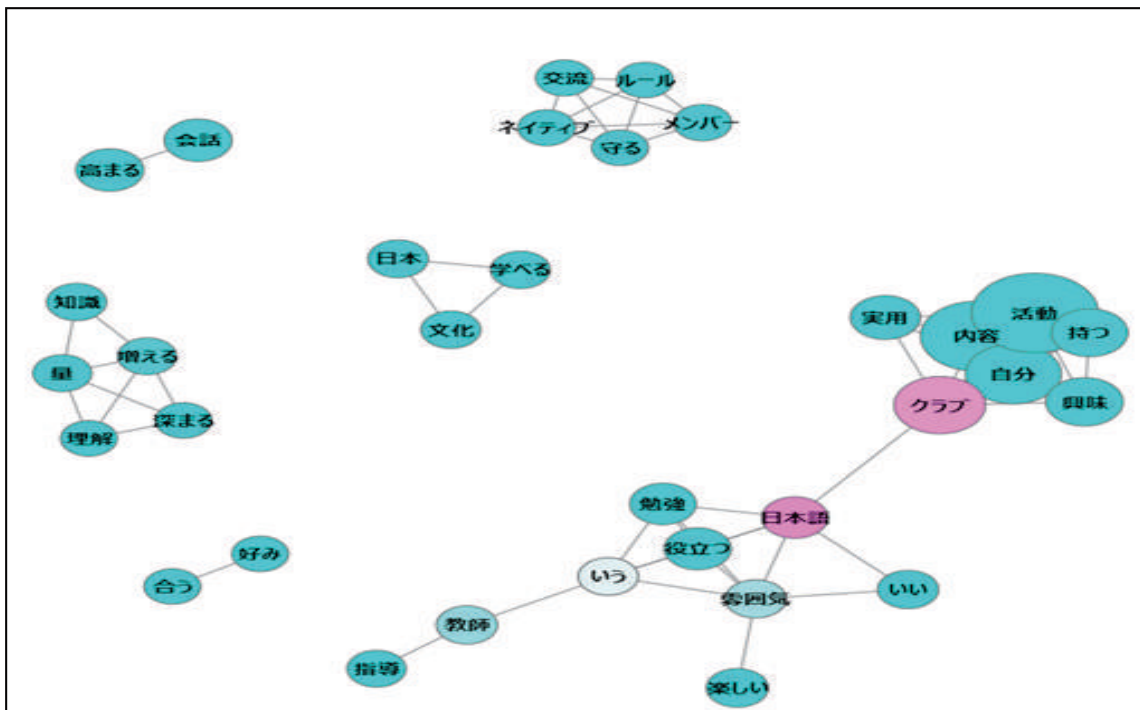


図 3 クラブを選ぶとき最も重視するもの

「クラブを選ぶとき最も重視する点は何か」に対し、いろいろな意見が上がった。1度しか出されなかった意見を個別意見として取り除き、残りの意見を KH Coder ソフトで分析した。図 3 のように示すが、調査者の回答に出てくる言葉は頻度が高いほど円が大きく表れている。

図 3 よりみられる傾向としては、学生はクラブ活動の参加に関し最も重視する点は活動の内容である。その活動は自分にとって実用的であるかどうか、自分が興味を持っているかどうかである。次に重視する点は、日本語の勉強に役立つかどうか、雰囲気・指導教師から楽しく感じられるかどうかである。また、クラブの参加によって豊富な知識が得られること、日本文化について多く知ること、会話力が高まることも多くの意見があった。クラブのメンバーについては、ネイティブと交流の機会が多いこと、メンバーがきちんと決めたルールを守ることが挙げられた。

「大学は必ず語学クラブに入るようにと規定している。そして単位も与えている。その目的はなんだと思うか」に対し、194 件の意見が回収できた。KJ 法で分類したところ、クラブ活動の指導教師と同じ目的意識を持って活動に参加する学生は 33.5%に留まった。教師の考えと一致していないが肯定的な意見（例えば「学生の人間力を高めるため」「学生の視野を広めるため」など）と否定的な意見（例えば「授業後の時間も日本語の勉強を強制的にさせるため」「学生を監視して見張るため」など）に分かれた。肯定的な意見は 54.1%で、否定的な意見は 12.4%であった。否定的な意見を持つ学生は、大学が行っているクラブ活動に対して無理解の上、自分たちに対する「監視」、「見張る」、「強制」ということまで考えている。

質問「語学関連クラブに参加して、あなたの日本語の学習意欲にどんな影響を与えたか。その原因は何か」の前半部分に、「意欲が向上した」と答えた学生は 102 人

(61.8%) いた。「意欲が変わらなかった」と答えた学生が 62 人 (37.6%) いた。「意欲が低下した」と答えた学生が 1 人 (0.6%) いた。

「意欲が向上した」と答えた学生からは理由について 95 件の回答があった。KJ 法で分類すると、「必要と感じた」、「喜びを感じた」、「気づいた」といった桜井 (2009) の図 1 で示した統一化的調整、統合的調整、内発的調整の 3 つの要素が見られた。(表 4)「意欲が変わらなかった」と答えた学生はその理由について 44 件の回答があった。分類すると、「内容の問題と参加者の問題」に分けられた。(表 5)「意欲が低下した」と答えた学生は

その理由についての記述はなかった。

表 4 クラブ活動の参加で日本語学習のモチベーションが「上がった」理由

必要と感じた 〈25 件〉	<ul style="list-style-type: none"> ● 日本人の指導教師と通じたい 〈9〉 ● 日本についてもっと知りたくなった 〈8〉 ● 日本語を使う機会が増えたから上手になりたい 〈7〉 ● 日本へ行ってみたくなった 〈1〉
喜びを感じた 〈59 件〉	<ul style="list-style-type: none"> ● 日本語に興味を持つようになった 〈32〉 ● 日本に対する理解が深まった 〈9〉 ● 日本人の指導教師と接する機会が増えて嬉しい 〈5〉 ● 日本語学習に大変役立った 〈4〉 ● 自信が湧いた 〈4〉 ● 参加の仲間たちが好き 〈2〉 ● 指導の先生がいい 〈2〉 ● いい日本語勉強法を見つけた 〈1〉
気づいた 〈11 件〉	<ul style="list-style-type: none"> ● 分からないことが多いのに気付いた 〈10〉 ● 参加者の仲間に比べて差が大きいことに気づいた 〈1〉

表 5 クラブ活動の参加で日本語学習のモチベーションが「変わらなかった」理由

内容の問題 〈41 件〉	<ul style="list-style-type: none"> ● 日本語授業の内容とあまり関係なかった 〈16〉 ● 活動内容に興味が湧かなかった 〈16〉 ● 何も新しい知識を得られなかった 〈4〉 ● 授業の形と変わらなく、自主学習がなかった 〈4〉 ● アニメ鑑賞ぐらいなら自分でもどこでもできる 〈1〉
参加者の問題 〈3 件〉	<ul style="list-style-type: none"> ● やることがいっぱい、参加したが心身とも余裕がなかった 〈1〉 ● 参加者は情熱がなく、雰囲気が悪かった 〈2〉

さらに、日本語学習意欲が上がった 102 人の質問「日本語関連クラブに参加して、日本語学習効果にどんな影響を与えたか。原因も教えてください」に対する答えを抽出した。すると、日本語勉強の効果に結びついた人は 45.1%に留まった。「効果が現れなかった」53.9%が書いた原因（43 件）を抽出して、表 6 にまとめた。

表 6 モチベーションの向上が学習効果に結びつかなかった原因

活動内容の問題 〈36 件〉	<ul style="list-style-type: none"> ● クラブで勉強した知識は授業の内容と関係ないから 〈15〉 ● クラブで勉強した内容はテストに出ないから 〈10〉 ● 活動の回数が少ないから 〈7〉 ● クラブで勉強した内容はすぐ忘れてしまうから 〈2〉 ● 変化を感じ取れないから 〈2〉
学生自身の 問題（7 件）	<ul style="list-style-type: none"> ● 日本語を勉強する意欲が湧いてきたが、行動に移らなかったから 〈6〉 ● クラブの活動のために多くの時間を費やして、勉強できなかった 〈1〉

質問「必ず参加という規定がなかったら、あなたは日本語関連クラブに参加するか」、「日本語関連クラブに参加する時間的余裕があるか」、「語学関連クラブに参加した後、参加証明書のようなものがもらいたいのか」に対する答えを表 7 にまとめた。

質問「何語で日本語関連クラブを指導してもらいたいのか」に対し、日本語による指導を希望する学生が最も多く、68.3%（114 人）いた。次に日本語と中国語が混ざった指導で、28.1%（47 人）いた。中国語による指導を希望する者は 3.6%（6 人）いた。つまり、多くの学生がたとえ理解しにくくても日本語による指導を希望している。

表 7 3つの質問に対する答え

義務付けがなくても参加する	129人 (77.7%)
クラブ活動に参加する心身的余裕がある	100人 (63.5%)
参加証明書発行を希望する	127人 (77.0%)

第 3 章に述べた地球村の日本館は主に文化の授業や外国語関連のクラブ活動に使われている。日本語専攻の学生は日本館を中心に活動する。そこで、質問「もし可能ならば、地球村でどんな内容の講義を受けたいか」に対し、答えが 138 件あった。「日本文化」、「日本語で学ぶ中国文化」、「日本語の勉強」、「日中文化比較」関連はそれぞれ 87 件、17 件、27 件、7 件になっていた。本来の授業科目になっている「日本語の勉強」の分野を除いた詳細は図 4 で示す。

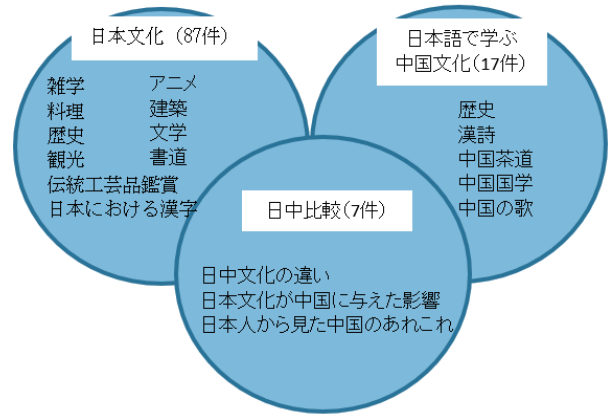


図 4 地球村日本館で受けたい講義

5. まとめと課題

5-1 カリキュラム外クラブ活動とカリキュラム内クラブ活動の違い

本稿はJ大学の日本語関連のクラブ活動をカリキュラム内活動とカリキュラム外活動に分けて観察した。観察の結果を表8に表示する。

表8 カリキュラム外クラブ活動とカリキュラム内クラブ活動の違い

		カリキュラム外活動	カリキュラム内活動
クラブ名（2013年現在）		空手道	茶道、日本企業研究、日本語スピーチ、日本語会話、日本語教授法、日本文化、日本語聴解、日本文学作品鑑賞、日本のアニメーション、日本語新聞、日本語演劇、日中通訳
大学の支援		全面的な支援が得られている	
クラブの目標設定		ある（演武、全員参加）	スピーチクラブのみ（選ばれた1, 2名）
指導者と学生との関係		初対面、新鮮味を互いに持っている	授業で互いに常時会っている
指導者	所属	J大学と関係のない日系企業の社員	J大学の日本語教師（日本人或は中国人）
	モチベーション	内発的動機づけ、積極的	外発的動機づけ、自信不足
	報酬	ない	ある（金銭・奨励）
	出席率	毎回出席している（2014王）	毎回、或いは2回に1度の出席を合わせて64%
参加者	モチベーション	内発的動機づけ	無動機づけか、外発的動機づけ
	報酬	ない	ある（単位の認定）
	活動内容	運動系、通訳を通じた日本語の使用	運動系以外、通訳なしの日本語使用
	課業との衝突	晩自習の時間と衝突している	勉強時間との衝突がなく、クラブ専用の時間を利用する
	出席率	全20回の100%参加（2014王）	15回のうち8回
	日本語学習意欲の変化	上がった（93.3%）（2014王）	上がった（61.8%）
日本語試験の成績の変化		口頭試験、平常試験で有意差が見られ、成績の向上が検証された。（2014王）	45.1%の参加者が上がったと感じた（成績表による分析は実施していない）

5-2 カリキュラム内日本語関連クラブ活動の問題点

J大学のカリキュラム内日本語関連のクラブ活動に参加する学生は、自分の意志によって日本語を習っている者が41.9%に留まったので、全体的にモチベーションが元々低いのは言うまでもない。また、一人っ子あるいは最も年齢の近い兄弟との年齢差が6歳以上の学生は78.2%もいた。そして、女子学生の比率が高い（82%）。先行研究にも示したように、これらの学生は自立性が弱く、非協調性が高い傾向がある。

カリキュラム内クラブ活動に対する調査の結果をフロー理論に基づいて分析すると、日本語で指導するクラブ活動の場合は、日本語能力が低い低学年参加者に不安を感じさせた。一方、指導教師不在の活動の場合は、日本語指導の言葉がやさしくなり、参加者に退屈を感じさせた。このような状態には目標設定が必要であると思われるが、目標設定もないため、いつまでもフローチャンネル(図1)に到達できないのである。

また、自己決定理論に基づいて観察すると、「単位取得」という報酬は活動効果を下げる要因になった。そして、義務付けで参加した学生は、図1の自己決定の外発的動機付けの最も低い段階（無動機付け寄りの外的調整段階）におかれた。指導教師が頻繁に活

動現場に来るクラブの参加者、あるいは活動内容が妥当であるクラブの参加者は、順調に内発的動機付け寄りの段階に進んでいけるが、そうでないクラブの参加者は、いつまでも内発的動機付けの段階に進めず、モチベーションが上がらないのである。

したがって、カリキュラム内活動の問題を大きく分類すると、以下の3点が考えられる。

1) 中国人指導教師の不安をめぐる問題

中国人指導教師は日本語教育の経験あるいは日本文化について学んだ経歴が短く、また大学教師としての自身の業績不足に対して、不安を抱えていることが明らかになった。教師の不安あるいは自信不足ということによって、クラブ活動の現場に行っても実在的存在価値が低く、事情の分からない学生から見れば「監視」的に思われがちである。

2) 参加学生の心理的不満をめぐる問題

教師と同じ目的意識を持って活動に参加した学生は33.5%しかいなかった。活動の目的を学生の自己理解に任せているため、認識の錯誤が生じ、「監視」、「見張る」、「強制」、「大学の宣伝」との否定な考えに陥ることになったと思われる。

3) 活動運営システムの不足をめぐる問題

教師と学生の両者の調査データから見られたが、クラブ活動の義務付け参加は2つの弊害を招いた。

- (1) 単位を早く取りたいために入学して間もなく殺到したクラブ活動の参加によって、無興味の参加、受講困難、形だけの活動などの問題が生じた。
- (2) 単位を取得すればよいと思われているため、高学年が活動に参加しない現象が生じた。本来のクラブ活動の意義と本末転倒した結果になった。

5-3 日本語学習に役立つクラブ活動の提案

これまでの考察を踏まえて、J大学のような中国での日本語学習に役立つ外国語関連クラブ活動のやり方について、次の5点が提案できると思われる。

1) 日本語関連のクラブ活動への参加を自由にする。

調査対象になった167名の学生のうち、77.7%がたとえ大学からの義務付け参加がなくても、参加すると表明した。実際、残りの22.8%も、友人の参加などに影響される集団心理による参加もあると考えられる。

2) 日本語関連のクラブ活動を指導する教師の資質を配慮すること。

日本語母語話者ではない中国人日本語教師の場合は、日本語の会話力が高く、得意分野を持つ教師なら、モチベーションが高いことによって、クラブ活動の内容や雰囲気もよくすることができると考えられる。

3) クラブ活動に目標を設定すること。

空手道何段、書道何級といった公認の資格試験のある活動内容であれば非常に有利であるが、それがない場合は、公演やコンテストなどのような活動成果を披露する機会を設定することで、参加者に一体感を与える。活動効果を高めることにつながるであろう。

4) クラブ活動に協力する学生通訳を設けること。

クラブ活動の参加者は、指導教師と意思疎通の問題がある。しかし、先輩の通訳によって意思の疎通ができるようになり、通訳者に対する感謝と憧れが生じ、クラブ活動の参加に情熱を注ぐであろう。

5) クラブ活動と授業内容の関連付けを設定すること。

日本語関連のクラブ活動は、日本文化の理解を深める活動内容によって日本語の勉強意欲を高めることが目的の一つである。そのため、成績を評価する際、日本語関連のクラブ活動で学んだ知識との関連付けを考慮したほうが、学生に見える参加効果を与えることができ、モチベーションの向上につながりやすいと思われる。

6) クラブ活動の内容に一定の随意性を持たせるようにすること。

教師と学生の認識の差はクラブ活動の効果に影響を与えると思われる。学生が求めている内容は既存のクラブ活動以外にも多くあった。現代社会の急速な発展に伴い、学生の心理的特徴も変わっていくのである。一定の随意性を持たず活動内容は活動参加の学生の動機づけにつながる。

5-4 今後の課題

今後、本論の調査研究結果を用いて、J大学の日本語教育現場でクラブ活動の見直しに繋がる試み、定期的に新たな調査を行い、データを集計・分析することによって本論の研究を発展させていきたい。

謝辞

本研究論文の作成に当たり、計画段階から完成に至るまで中川良雄教授の一貫した丁寧なご指導がなければ、完成することができませんでした。ここで深く感謝の意を申し上げます。また、

本研究論文は、『双語専攻英日方向教育方法の研究と実践』という中国吉林省の教育科学十二の教育五か年計画プロジェクトの一部として、研究支援をいただいております。感謝いたします。

注

- (1) 吉林華橋外国語大学は、中国吉林省長春市にある外国語大学である。
- (2) 吉林華橋外国語大学が留学や外国人・外国文化に接する機会が少ない学生のために建てられた地球状の建物。建築面積は 3991m。中に英語村、日本館等 13 の外国語村が設けてある。
- (3) KJ 法は、収集した多量の情報を効率よく整理するための手法で、収集した情報をカード化し、同じ系統のものでグループ化することで情報の整理と分析を行う。
- (4) KH Coder は、テキスト型（文章型）データを統計的に分析するためのソフトウェアで、アンケートの自由記述・インタビュー記録・新聞記事など、様々な社会調査データを分析に適応される。「計量テキスト分析」または「テキストマイニング」と呼ばれる方法に対応としている。

参考文献

- 王尤（2014）「中国人大学生の日本語教育への課外活動の有効性について」『日本語教育方法研究会誌』Vol. 21 No. 2, pp. 2-3.
- 王尤（2015）「中国人大学生の日本語教育への課外活動の有効性維持について」『日本語教育方法研究会誌』Vol. 22 No. 1, pp. 94-95.
- 侯桂芳（2002）「中国における一人っ子青年の性格特性と認知された親の養育態度」『性格心理学研究』2002 第 10 巻第 2 号, pp. 85-97.
- 桜井茂男（2009）『自ら学ぶ意欲の心理学——キャリア発達の視点を加えて』, 有斐閣.
- 羅丹・餅原尚子・久留一郎（2001）「中国と日本の「一人っ子」の比較研究」『鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要』11, pp. 65-73.
- 陈卓、李清富、王乔（2011）「浅析“90 后”独生子女大学生群体特质」《经济与社会发展》2011 年第 6 期.
- エドワード・L・デシ+リチャード・フラスト、桜井茂男監訳（1999）『人を伸ばす力』, 新曜社.
- M・チクセントミハイ、『フロー体験 喜びの現象学』, 今村浩明（訳）（1996）世界思想社
- Deci, E. L. & Ryan, R. M (1985) Intrinsic motivation and self-determination in human behavior. Plenum, 百度文庫 <http://wenku.baidu.com> 2015. 1. 10 参考

付質問票

学生に対する調査票の一部(本論に関係のある16問)

1(調査票A-問1)今の専攻を選んだ経緯は以下のどれか。

- (1)自分の考えで選んだ (2)親の意見に従った
(3)選んだ専攻に合格できなかったため配属された (4)原因がよく分からない
(5)その他の原因()

2(調査票A-問4) 参加したクラブ活動の効果はどうだったか。

- (1)よかったと思う (2) イマイチよくなかったと思う
(3)活動をしただけで、あまり効果がなかったと思う (4)活動が途中で終わってしまった

3(調査票B-1)あなたが日本語関連クラブ活動に参加した最も大きな原因は何か。

4(調査票B-2)日本語関連クラブを選ぶとき、最も重視する点は何か。

5(調査票B-3)あなたは第一希望の日本語関連クラブに入れたか。

6(調査票B-5)大学は必ず日本語関連クラブに入るようにと規定している。そして単位も与えている。大学の目的はなんだと思うか。

7(調査票B-6) 必ず参加という規定がなかったら、あなたは日本語関連クラブに参加するか。原因も教えてください。

8(調査票B-8)あなたが参加したそのクラブの指導教師はネイティブの先生であるか、それとも中国人の先生であるか。

9(調査票B-10)あなたが参加したそのクラブの指導先生はおよそ何回に一度活動現場に来てくれたか。

10(調査票B-12)何語で日本語関連クラブを指導してもらいたい。

11(調査票B-13)クラブ指導教師の存在が大切だと思うか。語学関連クラブの指導教師は固定したほうがいいと思うか。

12(調査票B-16)日本語関連クラブに参加して、あなたの日本語学習意欲にどんな影響を与えたか。原因も教えてください。

- (1)意欲が向上した (2)意欲が低下した (3)意欲が変わらなかった

13(調査票B-17)日本語関連クラブに参加して、あなたの日本語学習効果にどんな影響を与えたか。原因も教えてください。

- (1)効果が上がった (2)効果が下がった (3)変わらなかった

14(調査票B-18)あなたは日本語関連クラブに参加する時間的余裕があるか。それはなぜなのか。

15(調査票B-20)もし可能ならば、地球村でどんな授業を受けたいと思うか。

16(調査票B-22)日本語関連クラブに参加した後、参加証明書のようなものを希望するか。原因も教えてください。